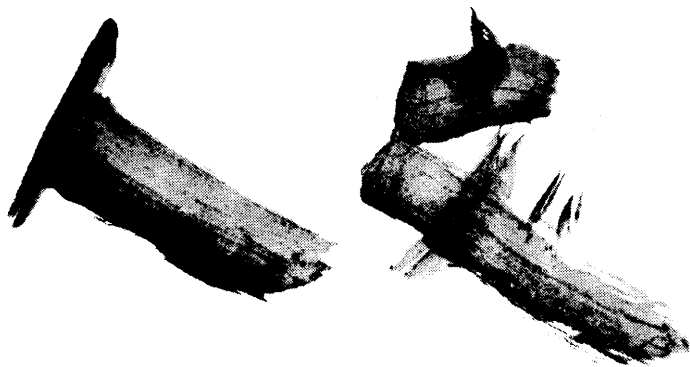


Title	人文 第40号
Author(s)	
Citation	人文 (1994), 40: 1-50
Issue Date	1994-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/57166">http://hdl.handle.net/2433/57166</a>
Right	
Type	Article
Textversion	publisher



第 四 ○ 号



1994

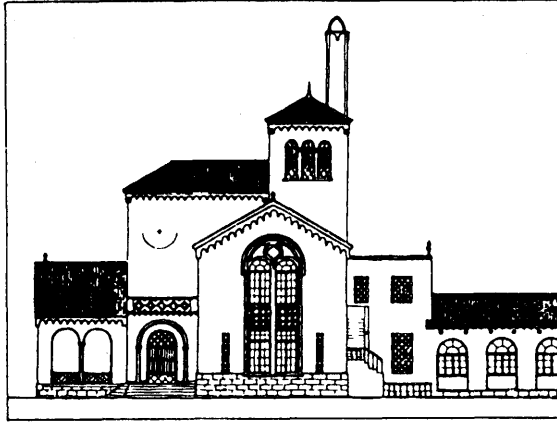
京都大学人文科学研究所

ISSN 0389—147X

# 人 文 第四〇号

1993年1月—1993年12月

も く じ



## 随想

史料の周辺から

きうりさん

八つの研究班

## 講演

夏期講座

歌い手たちの変貌―能の「ゴロス」とその意味づけ―(藤田)

―聖歌から聖音へ―古代インド宗教歌詠の思想性―(藤井)

―詩のことは―リユートからイメージへ―(宇佐美)

―漢代画像石墓の世界(曾布川)―仏像の出現―それは大乘經典にかかわらないか―(荒牧)

―天皇の画像―錦絵から御真影へ―(佐々木)

開所記念講演

貨幣の自成と自壊(安富) / 木札に書かれた中国古代(富谷)

―論理学と私(山下)

退官記念講演

祁彪佳と寓園について(荒井)

## 彙報

おくりもの(25) 人のうごき(25) 外国人研究員(27)

招聘外国人学者(27) 外国人研修員(28) 外国人研究生(28)

―東洋学文献センター講習会(29) お客さま(30)

## 共同研究の話題

知のラビリンス―その彷徨

中国音韻史の研究

コミュニケーションの自然誌

## 旅

アメリカの東アジア図書館

屋根のある瓶

スリランカ再訪で思ったこと

書いたもの一覧

おもしろく読んだ本

古屋 哲夫

山下 正男

磯波 護

10 10

2

19

23

25

31

35

50 39

## 史料の周辺から

古屋 哲 夫

私が人文研に着任したのは、第一期の河野健二所長時代であったが、初めてご挨拶に伺うと、「あなたは斎藤孝さん（学習院大学教授）をご存じですか」と聞かれたのが今でも印象に残っている。河野先生は東京の研究者と提携して、フランスに本部のある第二次大戦史研究の国際組織に協力する体制を作ろうとされておられたのであった。それからすぐに、第二次大戦期の史料収集を目的とし、関西と関東に十の研究組織をつくり、河野先生を代表、人文研を事務局とする特定研究が始まり、私が事務局の責任者の仕事を以後数年にわたって引き受けることとなった。

研究所の建物改築中も、この仕事があるからということで、仮住まいの旧石油化学の建物のなかで一番大きな部屋に、渡部徹先生と同室させていただいた。そのうえ、同先生のご配慮で私の机の上で直通電話が使えるようになったことは（当時はまだ交換台を通さなければ市外電話はかけられなかった）、オイル・ショックで入札不能となり、仮住まいが一年延びたことを



考えると、大変有り難いことであった。

この特定研究を出発点とし、その後も実験部門費や資料費を利用して収集を続け、戦前昭和期の史料については、関西では最大級の蓄積ができたと思っている。この間、東京の古本屋の奥の間に上がり込んで、まだ目録にのせていなかった田中清玄ら戦前のいわゆる武装共産党幹部の特高調書を買入れ、渡部先生に喜んで頂いたことなどは忘れ難い。その他、戦後堺市に合併された周辺町村の行政文書を譲り受けたり、大阪商工会議所の未整理資料の整理を手伝って、結局中国における日本人商工会議所関係の出版物を研究所に寄贈して頂いたのも、特定研究の延長上の収穫であった。

もちろんそうした現物で収集できたものは極く一部であり、ほとんどはマイクロ・フィルムによるコピーであり、そのうち重要と思われる部分を、アルバイトの人にリーダー・プリンターで焼き付けてもらうという仕事もずいぶんと続けたものであった。

しかしこうした仕事も、現在では残念ながらいろいろな問題が生じている。第一には、当時は湿式のプリンターしかなかったので、それで焼き付けて製本すると相当の重さにならざるを得なかったが、この湿式本をつくったために、その後に復刻版が出て購入しにくいという事態が生じたことである。帝国議会委員会速記録とか社会運動通信などはその例である。第二には、古くなったマイクロ・フィルムが、酢酸の臭いを発して、



べとついてくるという全く予想しなかった状態となり、図書室の方々を悩ませ始めるという問題が起こってきたことである。何か対策を考えて頂けるようお願いしたい。

振り返ってみると、いろいろな史料に手を出してきたが、十分に整理することも出来ないままに定年を迎えることになった。退職後も、まだ眼を通していない史料を利用して頂き、整理のお手伝いでもできればと考えている。



## きうりさん

山下 正男

吉田神社の二の鳥居をくぐった左手に今宮神社というお社があることにお気付きの方がおられるだろうか。この今宮神社は元官幣中社吉田神社とは無関係の神社であり、吉田村の郷社である。それゆえ人文研はこの神社の氏子であり、実際、十月十四日のお祭りには神輿が人文研のまえを通る。

さてこの今宮社の御祭神は木瓜（きうり）大明神であり、地元ではこのお宮をきうりさんと呼ぶ。そして吉田村の氏子はきうりを栽培することもないし、食べることもない。そうしたことは恐れ多いことからである。ところでこの神社の祭神は須佐之男命でもある。つまり木瓜大明神は須佐之男命と同体の神である。また今宮社はその神紋が牛頭天王（こずてんのう）を祀る祇園八坂神社と全くおなじ五つ円瓜（いっつもっこう）であることから、数ある天王社の一つであるといっている。

柳田国男は昭和十二年、京大で集中講義をおこない、人文研名誉教授の日比野さんもそれを聴講しておられる。日比野さんの話と、柳田が後に書き留めた文章を総合すると、柳田は、北



白川の瓜生山（うりうやま）と知恩院前の瓜生石（うりうせき）の「瓜生」を「くわしょう」と読み、天王勧請（くわんじょう）の意味だとこじつけることによって、須佐之男命Ⅱ牛頭天王と瓜との昔からの結びつきの説明を企てたようである。

しかしこうした語呂あわせよりは、京都の各所にいまも残されているきうり封じの行事にみられる、あらゆる災厄をきうりに封じこめて地中に埋めるといふ信仰と、疫病を払う須佐之男Ⅱ牛頭とのつながりで考えた方が民俗学の立場からみてふさわしいのではなからうか。

柳田はせっかく京大で講義しながらすぐそばの今宮神社の存在に気づかなかったと思われる。今宮神社の祭神は前述のとおり、須佐之男命Ⅱ牛頭天王Ⅱ木瓜大明神である。しかし今宮神社の祭神が須佐之男や牛頭よりは堂々と木瓜大明神と呼ばれてきたということは、今宮神社の祭神が、神家者流の須佐之男命でもなく仏家者流の牛頭天王でもなく、まさに民俗学レベルの産土神そのものであることを示すものである。

今宮神社の真上に藤原氏の吉田春日社がある。さらにその上に、吉田神道の教義で固められた大元宮がある。しかし私には「きつりさん」にいちばんの親しみが感じられるのである。





## 八つの研究班

礪波 護

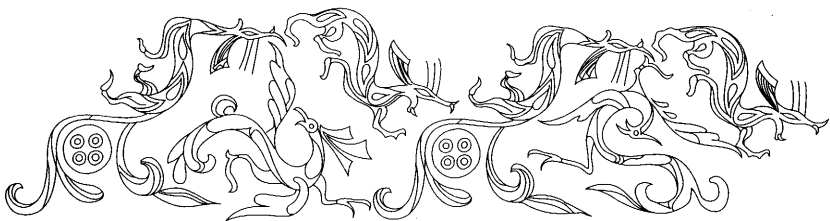
余儀なき事情で研究所を出てから早一年近く、普通より七年も速く本誌に退去の弁を書く破目におちいった。私が東方部の助手として入所したのは一九六五年四月であるが、人文研のトリード・マークである共同研究班に出席し始めたのは、更に五年をさかのぼる六〇年春なので、研究班へのかかわりは三十四年に及ぶ。その間に研究班の運営のありかたなど、おおいに変貌をとげたので、回想風に記録を残しておこう。

大学院の修士課程に入るや、塚本善隆班長の「弘明集の研究」班（水曜午後）に加えていただいた外、東洋史の授業を兼ねていた森鹿三班長の「魏晋南北朝地方制度の研究」班（授業の題目としては「唐律疏議の研究」、月曜午前）と宮崎市定班長の「雍正硃批諭旨の研究」班（金曜午後）に出席し、単位をとるために当然のことながら順番に会読を担当した。まもなく藤枝晃先生に勧誘されて敦煌写本の会読（月曜午後）に加わったが、当時は正規の研究班ではなかったらしい。いずれにせよ、大学院生としての五年間、毎週月水金の三日間は、北白川なる



本館入口に近い会議室に顔を出していたが、東洋学文献センターは設置されていなかったので、図書閲覧をすることはなかった。

助手は仕事の上では研究班に所属して班長の指導のもとに研究に協力するものとされ、平岡武夫先生が主宰される「唐代史料・索引の編集」班に採用された私は、哲学文学研究室に席を与えられた。私にとって僥倖だったのは、十余年にわたって編集刊行されてきた「唐代研究のしおり」十二種十六冊の大事業があたかも完結しおわった時点で研究室に入ったことで、私の本務は『東方学報』に載せる「唐代史料稿」の原稿作成だけということになった。哲文のメンバーになったことで、平岡班長の「白氏文集の校定」班（金曜午後）と田中謙二班長の「元曲の研究」班（土曜午前）に参加し、時間帯の重なる殊批諭旨班からは撤退した。哲文での研究班は漢文訓読ではなく中国語で進行されていたので、平岡先生は私一人のために一年三ヵ月もの間、夏休みも冬休みもなく、毎朝九時から小一時間、中国語の特訓をして下さった。いま想い返しても、ありがたい限りであった。入所二年目からは西洋部の会田雄次班長の「封建国家の比較研究」班（火曜午後）に、やがては日比野丈夫班長の「中国金石資料の研究班」（木曜午後）に加わった。これら多くの研究班に出席したことで、ひとくちに共同研究班といっても、班長の学力や個性により、班員の研究意欲をかりたてるものもあれば、重苦しくさせるものもあり、千差万別なるを体験しえ

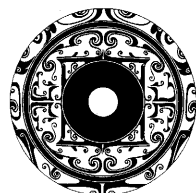


た。ともあれ、いわゆる大学紛争の煽りで共同研究班の形骸化が論議された際、私が同時に八つの研究班に出席しているのが話題とされた。吉田光邦先生から、「自分は同時に六班にでたことがありレコード・ホルダーだったが、八つとは新記録だよ」と言われた。

一九七〇年度から全面的に見直された共同研究班の新体制が発足した際、東方部では、過渡的な措置として、漢籍の整理と文献類目の編集それに索引作成を目的とする三つの委員会を設置して研究班に準ずる扱いとするプランが、部主任の平岡先生から提案された。しかし、私が反乱をおこす格好となって、索引委員会案だけは葬りさられた。そのあと、神戸大学文学部に三年ばかり転出した前後、漢籍委員会と類目委員会に参加し、私自身は貴重な経験をつむことができた。しかし、両委員会はかならずしも順調に運営をつづけられなかったらしい。やがて漢籍委員会が消滅し、最後に残っていた類目委員会を研究班に準じて扱うのを中止したのが、私の二度目の転出時期にぴたり重なったことに因縁めいたものを感じている。



## 講演



夏期講座（一九九三年度）

七月九日—十日  
於 本館会議室

統一テーマ 絵とうた——文化の現場を読む

### 歌い手たちの変貌

——能の「コロス」とその意味づけ

藤 田 隆 則

ギリシヤ悲劇におけるコロス（合唱隊・あるいは合唱隊が担当する文言）は、作劇史上次第に重要性を失ない、周縁化されていった。いっぽう、日本の能の演出の歴史においては、合唱隊（地謡ぢうたうと呼ばれる）が次第にその人数を増やし、それまでは各役柄にふりわ

けられていた文言の多くを、それら役柄の代わりに担当するようになるという変化があった。

この発表においては、その人数増大の具体的な過程を示す図像資料を提示し、人数増大が起こった理由をいくつか推測して述べ、さらに、人数増大の結果、もともと中心となっていたはずのシテ、ワキなど扮装した歌い手たちが、どのようにその演技を変えていったかについて述べた。

言いたかったことをここでもう一度モデル的に整理すると次のようになる。能は演劇として出発し、扮装した複数の役者が言語的なセリフを駆使する芸であった。ところがある段階で、役者が世間で流行する歌手のものまねをするようになる。その段階で、能にとつては歌という表現媒体が、セリフのやりとりというもともとの枠組みよりも中心化するのである。しかる後に、歌の部分が、一座のメンバーによって共に歌われたり、観客を巻き込んで歌われるようになる。こうして合唱部分や合唱人数は増大していった。

以上のことを具体的な資料にもとづきながら述べた上で、「歌」の定義を行った。「歌」とは「複数の人間が同じ言葉を言うための装置」とであると定義し、話を結んだ。

この定義からわかることかと思われるが、私は合

唱の増大を語るにあたって、もともとの歌い手たちと、その周囲のメンバーや観客が、歌の模倣的享受によって見せる側―見る側という制度的な枠を越えて、舞台上で同化するイメージ一本で語ろうとした。しかしながら、当日フロアから質問をつきつけられることになった。

それは、合唱隊がなぜ「地謡」と呼ばれているのかという質問であった。「地」という言葉は、中心に対する周辺というニュアンスを持っているが、もしそれが無視できないものであれば、同化モデルだけではダメなのだ、という批判として、私はフロアからの質問を受けとった。質疑の過程でうまく答えられたとは思わないが、私は、「中心」対「地」という差異化が、周辺の中心指向（あるいは同化）をさらに促がす機構として働いているのではないかという示唆だけは行っていた。が、その具体的検討は今後の宿題として残されている。

## 聖歌から聖音へ

―古代インド宗教歌詠の思想性―

藤井 正人

「うた」として歌詞とメロディのどちらがより本質的なのか。古代インドの宗教歌詠は、まさにこの問題をめぐって展開した。歌詠の中により純粹なもの、不変なものを求めて、ついには聖なる単音そのものに対する哲学を開始するにいたった。

仏教が登場する以前の紀元前八〇〇年から紀元前五〇〇年ごろ、一般に後期ヴェーダ時代といわれる時代に、古代インドの宗教歌詠にある変化が生じた。本来、歌詞（神々の讃美が主な内容）をのせて歌われるべき歌詠から、実際に詠唱される宗教儀礼の場面において可能な限り歌詞を取り除こうという動きが出てきたのである。そしてついには、ある種の歌詠では、はじめの部分を除いてすべての歌詞を捨て去るということが行われるようになった。歌詞に代わって、ある一つの音―ここで取り上げる歌詠では「オー」という音―だけで歌を歌うことが行われるようになった。古代インドの宗教歌詠に起こったこの変化の背後には、当時の

思想界の動きがあった。また逆に、この宗教歌詠の変化そのものが新たに思想の展開を促した。歌詠の変化は、現象そのものとしては小さなものであるが、これに関連して展開した思想の面をとらえれば、インド思想の二つの枠組みの形成に関与した点できわめて重大なものであった。

歌詞のない歌詠の究極的な純粋性が、一方では、ヴェーダ儀礼にもともと含まれていた、儀礼の参加者が天界へ昇るというイメージを大きく膨らませ、人間のことはもつて有限性を捨てた「うた」そのものの力によって、有限な身体を捨てて永遠な世界へと昇るという思想を展開させた。この思想は、再生説から輪廻説、さらにそれを越えた解脱説へと展開する思想の動きの出発点になった。また同じ究極的な純粋性が、他方では、多様なことはの背後にある最も根源的な聖なる音に対する思想を展開させた。この思想は、万物の奥により根源的なものをたどり、その究極のところにある唯一のものをい出そうとする、仏教を含めたインド思想の共通の流れにつながって行った。

現場に起こった変化の背後には、それを起こした思想の動きがあり、そして逆に現場の変化が次の新たな時に飛躍的な思想の展開を促す——この思想史のダイナミズムが古代インドの宗教歌詠に鮮やかに見られる。

## 詩のことば

— リュートからイメージへ —

宇佐美 齊

詩歌の発生いらい韻文は、デュルケムのいわゆる「聖なるもの」と「禁忌」という二つの概念と深くかわりながら、「俗なるもの」の言語すなわち日常言語とは峻別されたところで、人類数千年の歴史とともに栄えて来た。マクロの視野に立ってこれを振り返ったときに観察される大きな転換点は、言うまでもなく文字による定着と印刷術の普及であった。音声のみにたよった口頭の詞章から文書によって存続の保証を与えられた詞章へ、そしてさらに大量に複製されることによって次第に音声を失ってゆくテキストへ、このふたつの転換が韻文に促した変容には著しいものがある。第一の転換に関しては、ミッシェル・ビュートルが「小説と詩」と題するエッセーのなかで用いたひとつの比喩によって、多くを語らせることが出来るだろう。例えば中世宮廷詩人は、いくつかの詩節から成る短い抒情詩を朗誦するに際して、リュートによる伴奏を不

可欠のものとした。つまり初めと終り、あるいは場合によっては詩節と詩節の間に和音を奏でることによって、詩のことはを他の日常的な言説から切り離す儀式を必要としたのである。この伴奏の音楽がやがて詩のテクストそのもののなかに入って行ったのであり、古典主義による作詩法の完成と韻律法の確立はその流れの必然的な帰結だった。第二の大きな転換は、十八世紀における韻文の衰退とこれと対照をなす散文の飛躍的な成熟発展であった。これには、韻文じたいが内部に抱え込んだ自壊の要因（例えばたえざる自己模倣とマンネリズム）に加えて、さまざまな歴史的社会的要因が考えられる。恐らくそのうちでもっとも大きなものは、「信仰」の衰退であった。神学ドクトリンと教会コミュニティが揺らぎ始め崩壊への道を突き進んだヨーロッパ近代は、神を弑逆すると同時に韻文をも圧殺しようとしたのである。

さてその後の近代詩は、自らの存続を賭けて二つの方向から抵抗を試みかつ転身を図ることになる。第一は十九世紀初頭における散文詩の成立とその後の発展であり、第二は一八七〇年前後における自由韻律詩の出現であった。いずれも今世紀に入ってから、いわば詩の世界を支える両輪として隆盛をみることになる。現代詩の新しい流れは、古典的韻律法が何よりも音楽

性を重視したのに対して、イメージを韻律法の支えとみなすようになる。ブルトンを代表とするシュルレアリストたちが意識的に用いたのは、「可能なかぎり対照的なものの唐突な出会いから「イメージの光」をほとばしらせる手法であった。旧来の比喩や見立てではなく、電位差を利用した衝撃としてのイメージを詩法の要としたのである。詩の現在と未来に関しては、現代社会における「聖なるもの」の命運とその表象について見極めることが必要である。そのためには、メディアの転換、特に映像表現の問題とともに、以上のような詩歌の転変の歴史をもさらに深く考察する必要があるだろう。

## 漢代画像石墓の世界

曾布川 寛

画像石の代名詞として古来有名な山東省嘉祥県の武氏祠に、祠堂の天井に使われた一枚の画像石がある。右下に土饅頭を三つ重ねた墳墓があり、そこから黒煙が立ち昇って、煙の上には二輛の馬車が羽人たちに守られながら乗っており、上方にいる西王母、東王父の所へ今まさに到達せんとしている。また地上ではこの黒煙に墓守りが何事が起きたかと飛び出して来、墓参りに来た貴人もあわてふためいている。これが二世紀半ば頃の後漢人が描いた死者の靈魂の昇仙のイメージであり、馬車に乗っているのはいうまでもなく墓の主人公夫婦である。

漢代にはこのような昇仙が墓の装飾の主要テーマとして表された。前漢初期、紀元前一六八年前頃の有名な長沙馬王堆漢墓から出土した帛画にも昇仙が表されており、墓主人の軼侯夫人が二頭立ての龍の舟に乗って、上方の崑崙山の門めがけて今まさに昇仙して行こうとするところが描かれていた。崑崙山とは大地の中央に

位置する不死の聖域であり、そこが死者の靈魂の行き着く先と考えられたのである。同じような昇仙図は前漢中期の臨沂金雀山漢墓帛画、洛陽卜千秋墓壁画にも表されており、当時、相当広範囲に流行したことが知られた。

この昇仙図の流行は、紀元後の後漢時代に入っても衰えなかったようである。それをまず教えてくれたのが、徐州の沛県棲山漢墓から出土した前漢末期の画像石棺であった。この石棺は内外両面に画像が刻され、特に内側側板には、左側板は西王母とその世界、右側板は西王母の世界への馬車による昇仙と昇仙後の生活の有り様が描かれていた。新たに西王母が崑崙山に住む神となり、昇仙の乗り物が龍から現実的な馬車へと変わったが、明らかに昇仙図である。そして注目すべきことに、西王母の住む樓閣には金雀山帛画の崑崙山の樓閣と同じように屋根に崑崙山の象徴として「長生樹」が生えており、帛画昇仙図の伝統は受け継がれていたのである。

そしてこの石棺画像を手がかりにみていくと、同時期の南陽地域でも磚室墓の墓門に画像磚を使って昇仙図が表されており、更に後漢中期以後には、四川、陝北、山東、徐州、南陽のいわゆる画像石、画像磚の本場で盛んに表された。四川成都の昭覺寺画像磚墓を例



にとると、墓室の左壁に十箇の画像磚を使って車馬行列による昇仙出行の有り様、右壁に十箇の画像石を使って闕門内の西王母の世界での拝礼、宴樂、收穫、塩場など生活の有り様を描き、奥壁の高処には墓主人夫婦を前にして西王母が君臨していた。また有名な山東沂南画像石墓では、中室周囲の上横額に出行、拝礼、廊院、庖廚、百戯と昇仙の光景が順を追って带状に描写され、室中央の八角柱の東西面に東王父と西王母が描かれていた。二世紀中頃から西王母から東王父が派生し、ともに昇仙の先と考えられたのである。

また山東の武氏祠、宋山小祠堂など祠堂にも昇仙図が表現され、コ字形をした三壁の最下層に昇仙出行、奥壁に拝礼、左右壁の最上部に昇仙の先として西王母と東王父が描かれた。これらは当時の人々の昇仙願望が如何に強かったかを物語っているのである。

## 仏像の出現

—それは大乘經典にかかわらないか—

荒 牧 典 俊

インド仏教史上、いまだに解決を見ていない難問中の難問二題として、「仏像の起源」と「大乘仏教の成立」を挙げるに、躊躇する人はいないであろう。どうして、そうなったのだろうか。

「仏像の起源」は、主として仏教美術史家によって様式史的に研究されてきたが故に、どのような仏教思想運動の必然性からして、仏像が出現したか、が理解されなかったのではないか。「大乘仏教の成立」は、主として仏教学者によって文献学的に研究されてきたが故に、仏そのひとをまのあたりにする宗教体験を求めて大乘經典がほめうたわれたことが理解されなかったのではないか。そうだとすると、仏像という「絵」が現成しつつあり、大乘經典という「うた」がうたわれつつある「現場」を理解することによって、二つの難問が、一挙に解決されるかも知れない、と考えて準備をはじめたのであるが：

近年の仏教美術史の研究は、従来フーシェにしたがって「舍衛城の神変」のシーンとして十把一からげに片づけられてきたガンダーラ仏図の多くが、実はそうではなくして大乘仏教的な多仏思想を表現していることを論証はじめているし、他方、仏伝文学や大乘經典文学が、ほめうた文学の性格をもち、ほめうたうことによって宗教体験——インドでは「聴聞効果 *śravaṇaphala*」とよばれる——を得ることを目的とすることも、理解されるようになっていく。これらの最近の研究動向をふまえて、あらためて仏塔という「法王」仏のいますところにおいて、どのような仏教彫刻図と仏教文学によって、どのような宗教体験が発達しつつあったか、をあとづけることを試みた。はじめにまず、紀元前二世紀のバールフト仏塔南門の入口の石柱の仏伝・本生図を分析して、そこには仏にまみえ説法を聴聞するよろこびが表現されていることを指摘した。そこに彫刻されているような多数の説話を物語りうたうあいだに「聴聞効果」によって、いつしかヒーローの菩薩になりきっているが、仏のいますところで、それらの説話図をまのあたりすることによって、いよいよ深く菩薩であることを体験するであろう。そのような背景から発達してくるとすれば、紀元後一世紀のマトゥラーにおいて、最初に仏塔の塔門の横梁中

央部に「帝釈窟説法図」として仏像が出現しはじめ、つぎにあたかも仏塔内部から出現するかのようにな基壇部に説法仏が、さらにおそらく基壇部周辺に梵天の説法勸請伝説にもとづく「釈迦三尊像」が出現すること、そこにおける説法のあらたなる展開、とくに讚菩薩しつつけて三昧のエクスタシーにおいて仏にま見えるといふ宗教体験と深くかわるのではなからうか。あきらかに仏像を前にして同一リフレインではめうたわれた讚仏文学が、そのまま初期大乘經典へと発達した実例も知られている。おそらく、仏塔から仏像が出現しはじめた段階で、いよいよ直々に仏にま見える、否、ま見えるだけでなく仏から必ずや仏となるであろう菩薩だとの印可証明をいただく——という「無生法忍」の宗教体験を得るためにこそ、般若経などの大乘經典が発達しはじめたと考えたい。

## 天皇の図像

— 錦絵から御真影へ —

佐々木 克

錦絵についての、総合的なデータがまだ作られていないので、確信をもって述べる、というわけには行かないが、錦絵のテーマとなった人物で、最も多く錦絵に描かれた人物は、西郷隆盛と明治天皇だといって、間違いないだろう。

研究者によれば、西郷関係の錦絵は、三五〇点余といわれるが、征韓論政変を描いたもの等の数点を除けば、ほとんどが西南戦争期の西郷を描いたもので、絵のテーマとしては、パターン化されている。

明治天皇関係のものは、どれくらい点数があるのか見当がつけにくいのが、私が集めたもの（写真・コピー）だけでも、一〇〇点をこえている。そして西郷錦絵と異って、肖像画風のもの、数々の行幸・巡幸を描いたもの、あるいは宮中でのプライベートな生活を想像したもの等々、バラエティーに豊む。

明治天皇関係の錦絵を、発行の年代順に並べてみる

と、いくつかの特徴がはっきりと浮び上る。それは以下のようなものである。

①明治九年までの錦絵には、天皇の顔は描かれない。初期のものは、鳳輦などが描かれるだけで、姿も見えないものが多い。

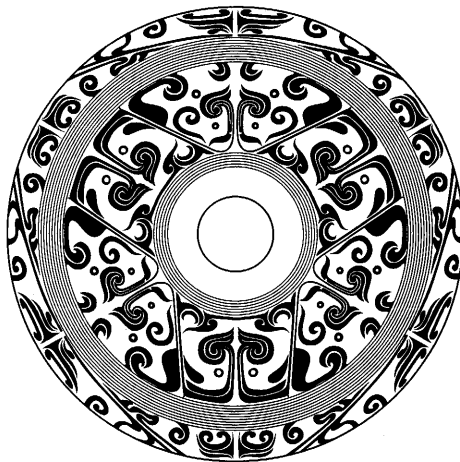
②明治十年になって、初めて天皇の顔が描かれるが、ヒゲがあったり無かったりする。ヒゲの軍人天皇イメージが定着するのが、十一年以降で、これは明治十一年の巡幸が要因となっているように思う。これから二二年の憲法発布までの絵が、圧倒的に多彩である。天皇と皇后が並んで描かれる、天皇ファミリーの絵が多数登場するのも、この時期である。

③憲法発布以後、錦絵の数そのものも少なくなり、絵のテーマも単調になる。これは天皇の行幸が激減し、従って生身の天皇が見えにくくなって行くこと、そして、二一年に御真影が作られ、配付されはじめ、天皇の記号化が進んで行くことに、その要因があるように思う。

天皇と西郷の錦絵が多数発行されたのは、それがよく売れたからであり、民衆に受けたからである。一人

---

は反乱する者（改革者？）で、もう一人は国民統合のシンボルであった。民衆は、これらの錦絵に、何を見たのだろうか。錦絵には読みとるべき、多くのものがつめ込まれているが、私はまだその入口で、ウロウロしているに過ぎない。



開所記念講演 (一九九三年度)

十一月十一日  
於 本館會議室

## 貨幣の自成と自壊

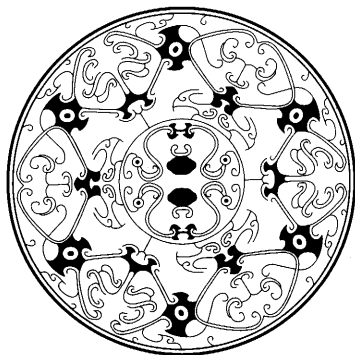
安 富 歩

人々が交換しようとする、そこには常に「欲望の二重の一致」という困難がつきまとう。自分の欲する商品を持っていて、しかも自分の所有する商品が必要しているような人が果たして見つかるかどうか、という困難である。この困難は分業が深まれば深まるほど深刻になる。人々がこの困難の支配下にあるとき、たまたま多くの人の欲求の集中する商品があれば、その商品は「欲求が集中している」という事実によって交換の媒介となる機能を萌芽的に獲得する可能性がある。もしそうであれば、この機能の獲得によってこの商品は交換の媒介としての欲求を更に獲得する。この獲得によって交換の媒介の機能は向上し、この向上によって欲求は更に獲得される。この循環関係の果てにその商品は貨幣となる。

このような循環関係が機能するためには、人々が少数の欲求の集中している商品を交換の媒介と看做して受け取る、という条件が必要である。もしこの閾値が高いと、「たまたま」によって集中する欲求はこの閾値を越えることが出来ず、循環関係は機能し得ないからである。とはいえ、この閾値を人々が試行錯誤によって決めるならば、交換を試みる過程で閾値は自ずから低くなり、上の循環関係を機能させるための条件は満たされる。すなわち貨幣は自律的に形成され、欲望の二重の一致の困難は自律的に解消される。

しかし、ひとたび貨幣が形成されるならば事情は変化する。貨幣が定まっている場合には貨幣のみを交換の媒介として受け取り、それ以外の商品はたとえ多少欲求が集中していようが、自分の本来の欲求がその商品に向っていない限り受け取らないという戦略が有利になる。つまり、貨幣の存在を前提とすれば、欲求が少数集中している商品の交換の媒介としての機能は貨幣に比べて著しく低くかつ不安定であり、低い閾値を採用する主体はこのような商品を貨幣と同等に受け取ってしまうので、より高い閾値を採用する主体に比して不利となる。こうして貨幣が存在する場合により高い閾値を採用する人が増加し、全体の閾値は自律的に上昇する。この閾値の上昇は貨幣を脆弱なものとし、貨幣

を貨幣と看做さず受け取りを拒否する人の数が「たま  
たま」普段より多くなっただけで、多くの人々がたち  
まち貨幣を貨幣として受け取らなくなるといふ事態を  
引起こす。すなわち、貨幣は自律的に崩壊するのであ  
る。



## 木札に書かれた中国古代

富谷 至

書写材料としての紙が発見される以前、中国では、木や竹が一般的な書写材料であった。木簡・竹簡（あわせて簡牘と総称）とそれは呼ばれているが、近年わが国でも平城京長屋王宮から、大量の木簡が出土している。ただ、日本の木簡は、すでに紙が書写材料として使われだされてからのものであり、それ故、用途は限定されている。

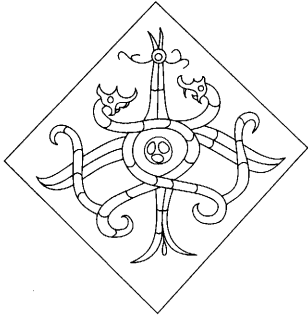
中国の場合、漢時代のもものが中心であり、特に辺境地帯の漢代烽燧遺跡から出土したもの（その数万点にのぼる）は、漢代、各官署・軍事施設で作成された帳簿、役所間でやりとりされた文書、その文書が送られるときのあて先を書いたもの（検）などであり、それらを分析することで漢代の文書行政の実態が浮かびあがってくる。

簡牘の研究は、その簡が移動してきたものか、役所で保存され送付されないもの（帳簿など）、さらには下書きの類なのか、簡文の記載に時間の差、書き手の差（同筆別筆）が認められるか等を詳細に観察し、簡

面に表れた微細な証拠を探し出さねばならない。

かかる研究を遂行していくためには、どうしても実物を手にとって実見することが必要で写真だけでの研究には、限界がある。

わが京都大学人文科学研究所は、今世紀初め、中国で簡牘が発見されて以来、いちはやくその研究に取り組み、簡牘研究において中国に勝るとも劣らない成果をあげてきた。しかし、今日中国から新しい簡牘が陸續として発見され、実物を手にして研究をすすめている中国の研究者と伍していくためには、どうすればよいのであろう。



## 論理学と私

山下 正 男

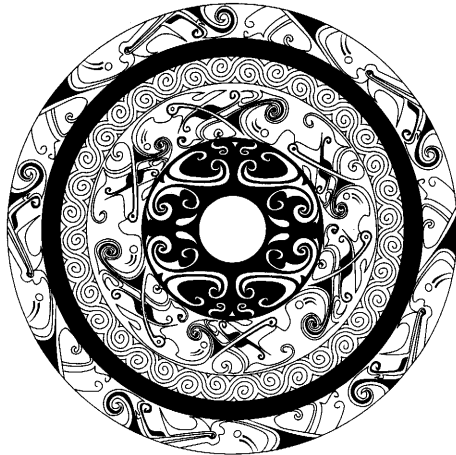
論理学は代数的にはブール束であり、幾何学的にはハッセの図式で表現される。ハッセの図式は零次元から始まって二次元、三次元、四次元……無限大次元にまで次元を高めることができる。とはいえ論理学の次元はデカルト空間の次元とは異なる。論理学の次元で構成される空間は論理空間であって、デカルト空間、さらにはデカルト空間を現実的事態に適用した時空的物理空間とは似ても似つかないものである。

デカルト座標空間の上で描かれる関数や方程式に対する、ハッセの論理空間上で描かれる論理式の関係は、「記号体系」に対する「記号体系の記号体系」の関係、「対象言語」に対する「高次言語」の関係である。数学が自然現象や経済現象を記述する「道具」だとすれば、論理学は「道具の道具」だといえる。一言にしていえば、論理学は孫悟空のあばれまわるお釈迦様の手のひらであり、あらゆる数理科学すなわち自然科学、近代経済学等々は、論理空間という手のひらの上のみ、自由にあばれまわるのである。

論理空間がお釈迦様の手のひらだといったが、それなら論理学の最高原理である無矛盾律を侵犯する非合理主義、神秘主義の体系は論理空間からはみだすのではなからうか。答えは否である。矛盾を含む体系は実は零次元の論理空間の中におさまるのである。

矛盾律を犯すわけではないが、対立した二つの概念の一致をやたらに主張する立場がある。いわゆる弁証法がそれである。弁証法論者たちはA即非AとまではいかなくてもA即Bという主張を好んでおこなう。かれらは反対物の合一、一体、一如といった表現が好きである。しかしそれは $\square$ 次元の論理空間をロー次元へと落とすことであり、貧弱化、不毛化のそしりを免がれない。

つぎに「私」の問題であるが、「私」はデカルトの「我思う、ゆえに我あり」のスローガンからもわかるように、哲学上の重要なテーマである。しかし哲学に限らず人間が生きていくうえで「私」は大切な用語である。とはいえ「私」は一人称単数の代名詞であり、文法で扱われるにはふさわしいが、関数にも方程式にも「私」という用語はでてこない。「私」を含む記号体系は自然言語であるが、この自然言語はもちろん論理学の支配に服する。そしていわゆる常識的哲学は、こうした自然言語を使用する哲学なのである。





## 退官記念講演

一九九三年三月十八日  
於 本館會議室

# 祁彪佳と寓園について

荒井 健

祁彪佳（一六〇二—一四五）という明末の文人は硬骨有能の官僚、そして明代の芝居品評記の作者として一般に知られている。しかし、かれにはまた別の一面があった。彪佳は大変な庭の数寄者であって、残された日記および自作の庭についての記述は、必ずしも豊富とはいえぬ旧中国の造園史料として、まことに貴重な文献といわずばなるまい。

祁彪佳、字は虎子、または幼文、号は世培。浙江の紹興府山陰県（現紹興市西北部）の人。山陰県の梅墅の祁家で生まれた。そのあたりは水路の縦横に通ずる平野に青々と樹木の茂った小山の点在する、風光明媚な水郷であるらしい。

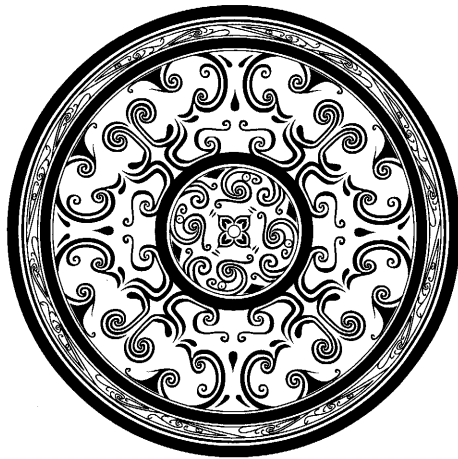
彪佳には三つの「癖」すなわち狂熱的な嗜好があった——蔵書癖、梨園癖、園林癖である。梨園癖すなわ

ち演劇趣味は別として、あとの蔵書癖すなわち愛書趣味と園林癖すなわち庭園趣味とはいずれも父の祁承燦（一五八三—一六二八）のそれを受けついだ。承燦は明代有数の蔵書家として名高い人物だが、実は今一つ庭園趣味の持ち主でもあった。むすこの趣味は父に影響されたにちがいない。

彪佳が自宅近傍の小山・寓山を利用して、崇禎八年（一六三五）から造作を始めた寓園の歴史は、その死の年弘光元年（一六四五）を以て幕が閉じられる。

寓園は、日本でいう回遊式庭園にはほ当る。目玉としての見所は四十九、それを四十九景として、彪佳は『寓山志』三冊に記録、自作他作の詩文をあつめて一本に編した。四十九景とは、（一）水明廊、（二）読易居、（三）呼虹幌、（四）讓鷗池、（五）踏香堤、（六）浮影台、（七）聴止橋、（八）沁月泉、（九）溪山草閣、（十）茶塢、（十一）冷雲石、（十二）友石樹、（十三）太古亭、（十四）小斜川、（十五）松径、（十六）桜桃林、（十七）選勝亭、（十八）虎角庵、（十九）袖海、（廿）瓶隱、（廿一）孤峯玉女台、（廿二）芙蓉渡、（廿三）廻波嶼、（廿四）妙賞亭、（廿五）小巒雉、（廿六）志帰斎、（廿七）天飄、（廿八）笛亭、（廿九）酣漱廊、（卅）爛柯山房、（卅一）約室、（卅二）鉄芝峯、（卅三）寓山草堂、（卅四）通霞台、（卅五）静者軒、（卅

六) 遠閣、(冊七) 柳陌、(冊八) 幽圃、(冊九) 抱甕  
小憩、(冊) 豊庄、(冊一) 梅坡、(冊二) 海翁梁、(冊  
三) 試鶯館、(冊四) 歸雲埭、(冊五) 即花舎、(冊六)  
宛転環、(冊七) 遠山堂、(冊八) 四負堂、(冊九) 八  
求楼であつた。このほかにも園主の作つた見所はいく  
つもあり、何よりもこの庭の特色は、恐らく永遠に完  
成されぬところにあつたと思われる。園主の生あるか  
ぎり、庭に手を入れ、また手を入れ、それがいつまで  
もやむことはなかつたと思われるから。ただ、庭の最  
終形態がどのようなになつたかはよく分らないが。



## 彙報

(一九九三年一月より一九九三年二月まで)

### おくりもの

。横山俊夫助教は、情報処理学会平成5年度研究賞を受賞(十月六日)

。山室信一助教は、吉野作造賞を受賞(十月一四日)

### 人のうごき

。荒井 健教授(東方部)は、停年退官(三月二二日付)、京都大学名誉教授の称号を授与(四月一日付)

。阪上 孝教授(西洋部)を当研究所所長及び附属東洋学文献センター長に併任(四月一日)一九九五年三月三十一日

。山田慶兒国際日本文化研究センター教授は、併任教授(西洋部)。(比較文化研究部門、四月一日)一九九四年三月三十一日

。岸本美緒東京大学助教は、併任助教

(東方部)。(比較文化研究部門、四月一日)一九九四年三月三十一日

。磯波 護教授(東方部)は、文学部教授に配置換(四月一日付)、併任教授(四月一日)一九九四年三月三十一日

。宇佐美 齊助教(西洋部)は、教授に昇任。

。藤井正人大阪大学文学部助手は、当研究所助教(西洋部)に昇任。

。矢木 毅氏を助手(東方部)に採用。

。上野成利氏を助手(西洋部)に採用(以上四月一日付)。

。水野直樹助教(日本部)は、一九九二年八月一〇日伊丹発、スタンフォード大学、ハーバード・イェンチン研究所に於いて朝鮮近代史、東アジア関係史に関する研究及び研究資料蒐集を行い、九月七日帰国。

。齋藤希史助手(日本部)は、一九九二年八月二八日伊丹発、北京大学に於いて中国文学理論史に関する研修及び研究資料蒐集を行い八月三十一日帰国。

。田中 淡助教(東方部)は、一月八日伊丹発、客家土楼、姑嫂塔、開元寺等に於いて中国の古建築調査及び研究資料蒐集を行い、一月一七日帰国。

。小野和子教授(東方部)は、三月一九日伊丹発、寧波大学、上海図書館に於いて一九九三年浙東學術國際研究討論会出席及び東林党に関する研究資料蒐集を行い、三月三十一日帰国。

。佐々木博光助手(西洋部)は、文部省在外研究員旅費により、三月二五日成田発、マックス・プランク研究所に於いてドイツにおける種族意識の形成過程に関する研究を行い、一九九四年一月二四日帰国。  
。田中雅一助教(西洋部)は、国際協力事業団負担により、四月八日伊丹発、ゴール、コロンボ水産省に於いて漁村の調査及び調査報告を行い、四月二九日帰国。

。横山俊夫助教(日本部)は、五月三〇日伊丹発、チュービンゲン大学日本文化研究所に於いて「日本の礼法」に関する講義を行い、七月四日帰国。

。前川和也教授(西洋部)は、文部省国際研究集会派遣研究員旅費及び人文科学研

究協会負担により、六月三〇日伊丹発、ライデン大学に於いてシュメール農業研究グループ集会出席・報告、大英博物館に於いてシュメール学に関する研究調査及び研究資料蒐集を行い、七月二四日帰国。

。桑山正進教授（東方部）は、七月四日伊丹発、ヘルシンキ大学ボルタニア校舎に於いて南アジア考古学者ヨーロッパ協会第二回国際集会出现、ヴィクトリア・アルバート博物館に於いてガンダーラ彫刻に関する研究資料蒐集を行い、七月一四日帰国。

。谷 泰教授（西洋部）は、七月一八日伊丹発、仏社会科学高等研究院歴史研究センター、パリ高等研究院、ミラノ大学に於いて人・家畜間関係についての文献資料蒐集及び調査を行い、八月一九日帰国。

。田中 淡助教授（東方部）は、委任経理金により、八月二二日伊丹発、香港大学に於いて第三四回アジア北アフリカ国際会議出席及び食物史に関する研究資料蒐集を行い、八月二八日帰国。

。小南一郎教授（東方部）は、九月二日伊

丹発、中国社会科学院文学研究所に於いて一九九三・中国古代小説研討会にて論文発表を行い、九月二二日帰国。

。曾布川 寛助教授（東方部）は、九月四日伊丹発、龍門石窟研究所、陝西省歴史博物館、兵馬俑坑博物館等に於いて龍門石窟二五〇〇周年国際學術討論会出席及び中国美術に関する研究資料蒐集を行い、九月二四日帰国。

。横手 裕助手（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、九月九日成田発、上海白雲觀、杭州抱朴道院、金華山等に於いて道教に関する調査及び研究資料蒐集を行い、十一月一日帰国。

。荒牧典俊教授（東方部）は、九月二九日伊丹発、インド国際センターに於いて「環境問題及び仏教の貢献」シンポジウムに出席し、一〇月八日帰国。

。桑山正進教授（東方部）は、一〇月二二日成田発、タフテバヒ遺跡、スワート寺院、シンガポール国立大学等に於いてガンダーラ遺物及びガンダーラ仏教に関する調査及び研究資料蒐集を行い、十一月九日帰国。

。稲葉 穰助手（東方部）は、十一月五日

成田発、スワート寺院、ベシャーワル大学、タキシラ遺跡等に於いて仏教寺院及びタキシラ遺跡に関する遺跡調査ならびに初期イスラム時代に関する写本及び遺物調査を行い、十一月二一日帰国。

。田中雅一助教授（西洋部）は、委任経理金により、十一月六日伊丹発、マドラス大学、タミル大学、デリー大学に於いて寺院儀礼と家庭祭祀の供物の人類学的研究を行い、十二月一六日帰国。

。横山俊夫助教授（日本部）は、十一月一四日伊丹発、ウィーン大学、国立工芸美術館、ブリギッテナウ国民大学校等に於いて一八七三年ウィーン万博に関する資料調査及び學術情報交換等を行い、十一月二三日帰国。

。狭間直樹教授（東方部）は、十一月二二日伊丹発、広東大廈ホテル、新会學術会議場、南海學術会議場に於いて「戊戌後康有為梁啓超与維新派」国際學術研討会に参加し、十一月二七日帰国。

。齋藤希史助手（日本部）は、十一月二一日伊丹発、広東大廈ホテル、新会學術会議場、南海學術会議場に於いて「戊戌後康有為梁啓超与維新派」国際學術研討会

参加、香港中文大学に於いて中国近代文学に関する研究資料蒐集を行い、一二月一日帰国。

。高田時雄助教授（東方部）は、十一月二四日伊丹発、北京大学、新疆ウイグル自治区文化庁に於いて新疆出土写本に関する研究資料蒐集を行い、一二月二四日帰国。

### 外国人研究員

。Jean Antoine Bellemín = Noël

パリ第八大学教授

精神分析批評の諸問題（文学テキストと無意識）の研究（比較社会客員部門）

受入教官 大浦助教授

期間 二月一日～七月三十一日

。Klaus Kracht

チュービンゲン大学教授、日本文化研究所所長

一九世紀日本の礼法の社会史的研究

（日本学客員部門）

受入教官 横山助教授

期間 八月一七日～

一九九四年四月一六日  
。Marianne Bastid = Bruguère

フランス国立科学センター研究主任、

パリ高等師範学校副学長

近代中国文化の諸相の研究

（比較社会客員部門）

受入教官 狭間教授

期間 九月一日～

一九九四年二月二八日

### 招聘外国人学者

。陳 映芳 華東政法学院大学講師

中国近代文化交流史の研究

受入教官 狭間教授

期間 四月一日～

一九九四年三月三十一日

。Timothy Barrett ロンドン大学教授

二世紀～一〇世紀中国における宗教・

国家と社会

受入教官 磯波教授

期間 四月一日～八月七日

。嚴 善昭 福建省中医学院講師

中国疫病流行とその社会的文化的連関

受入教官 菱谷助教授  
期間 四月一日～

一九九四年三月三十一日

。田 余慶 北京大学歴史系教授

六朝貴族制社会

受入教官 吉川教授

期間 四月一六日～七月一四日

。Janine A. Sawada グリネルカレッジ

助教授

一九世紀日本における宗教生活に関する研究——今北洪川を中心に——

受入教官 横山助教授

期間 六月一五日～

一九九四年六月一四日

。Silvio Vita ナポリ東洋大学助教授

唐・宋代仏教典籍研究

受入教官 桑山教授

期間 七月一日～九月三〇日

。Joshua Fogel カリフォルニア大学教授

授

清末のマスメディアについての研究

受入教官 狭間教授

期間 七月九日～一〇月八日

。Joan Judge ユタ大学助教授

《時報》の研究

受入教官 狭間教授

期間 七月九日～一〇月八日

。Götefrid Müller シェンヘン大学東方

研究所研究員

中国、日本におけるアナーキズム

受入教官 狭間教授

期間 九月一七日～

一九九四年三月一日

。陳 耀庭 上海社会科学院宗教研究所副  
研究員

神道儀礼と中国道教儀礼の比較研究

受入教官 麥谷助教授

期間 一〇月四日～

一九九四年六月三〇日

### 外国人研修員

。Fabrizio Pregadio イタリア東洋学研

究所研究員

「周易參同契」の文献的教義的伝統

受入教官 吉川教授

期間 二月一日～

一九九四年六月三〇日

。黎 志添 香港中文大学助手

初期道教の鍊丹実修

受入教官 麥谷助教授

期間 九月一四日～

一九九四年八月三一日

### 外国人研究者

。Lowell Dean Skar ペンシルバニア大

学博士課程学生

中国科学と宗教の關係

受入教官 田中淡助教授

期間 四月一日～九月三〇日

。Sabine Maria Fröhstück ウィーン大

学博士課程学生

日本人の身体理解と身体管理

受入教官 富永助教授

期間 四月一日～

一九九四年三月三一日

。林 紅 福建師範大学講師

明清婦女問題

受入教官 小野教授

期間 四月一日～

一九九四年三月三一日

。James George Robson カリフォルニ

ア大学博士課程学生

中国思想史における南嶽衡山の研究

受入教官 荒牧教授

期間 四月一日～

一九九四年三月三一日

。Monika Elisabeth Kure チュービン

ゲン大学博士課程学生

近代日本における書簡文例の研究

受入教官 横山助教授

期間 四月一日～

一九九四年三月三一日

。Franco Gatti ナポリ大学研究プロ

ジェクト員

道教文学

受入教官 麥谷助教授

期間 五月一日～

一九九四年四月三〇日

。Abigail Schweber ハーバード大学博

士課程学生

政治的社會化に関する研究

受入教官 山室助教授

期間 十月一日～

一九九四年三月三一日

# 東洋学文献センター講習会

隈元榮子

級)

。一九九三年度漢籍担当職員講習会 (漢籍電算処理)

第一日 (十月四日)

人文科学データベース (講演)

大型計算機センター教授 星野 聰

東洋学文献類目の編纂とフォーマット (講義)

都築澄子

TEXによる東洋学文献類目の出力 (講義)

(講義)

大型計算機センター技官 河野 典

AIと情報検索 (講義)

大型計算機センター助教授

大西 淳

第二日 (十月五日)

電子フォント作成法 (講義)

勝村哲也

漢字コードの問題点と

ISO10646 UCS (講義)

学術情報センター教授 宮沢 彰

計算機処理入門

情報化のトレンド (講義)

大型計算機センター技官

データベースについて (講義)

大型計算機センター助手 川原 稔

データベース検索 (一) (実習)

第三日 (十月六日)

知識情報処理 (講義)

大型計算機センター助手 石橋勇人

マルチメディアと言語処理 (講義)

国立民族学博物館助教授 久保正敏

データベース検索 (二) (実習)

第四日 (十月七日)

UNIXと情報検索 (講義)

大型計算機センター助手 安岡孝一

情報ネットワーク (講義)

大型計算機センター助教授

金澤正憲

データベース検索 (三) (実習)

第五日 (十月八日)

漢字コードの話 漢字と外字の処理 (講義)

大型計算機センター技官 小澤義明

大学間ネットワークの状況について (講義)

大型計算機センター技官 櫻井恒正

(講義)

。一九九三年度漢籍担当職員講習会 (初

第一日 (十一月八日)

漢籍の話 (講演)

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫 教授 尾崎 康

四部分類等 (講義)

京大名誉教授 清水 茂

第二日 (十一月九日)

経部書 (講義)

目録法 (講義)

第三日 (十一月十日)

史部書 (講義)

実習 (一)

第四日 (十一月十一日)

子・集部 (講義)

滋賀大学教育学部助教授

実習 (二)

第五日 (十一月十二日)

新学部 (講義)

実習 (三)

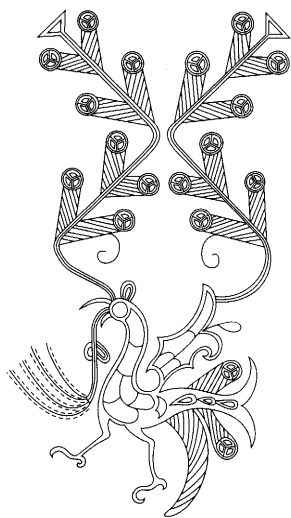
森 時彦

井波陵一

お客さま

一月二六日	安徽師範大学歴史系副研究員	唐 力行
三月二二日	エトヴェシ・ロラード大学教授 中国・東アジア科長	Endre Galla
四月 九日	中国社会科学院近代史研究所 研究員	劉 志琴
	副研究員	李 長莉
五月一日	南開大学歴史研究所長	南 炳文
五月一七日	リール科学技術大学教授 Christian Sches	葉 顯恩
五月二五日	広東社会科学院歴史研究所研究員	
六月 一日	中国社会科学院經濟研究所 研究員	朱 家楨
	副研究員	厲 以平
	助理研究員	苗 壯
六月一五日	Hobart and William Smith College教授 William S. Atwell	
六月二二日	中国社会科学院歴史研究所 副研究員	陳 柯雲
六月二五日	南京大学歴史研究所教授 南京大学留学生部江南經濟史研究室主任	茅 家琦
六月二九日	中国社会科学院經濟研究所 副研究員	嚴 学熙
		許 壇

九月二四日	ブカレスト大学教授	Andrei Gabriel Plesu
九月二七日	中国遼寧社会科学院研究員	彭 定安
九月二八日	浙江省社会科学院歴史研究所長	陳 学文
一〇月 六日	マラー大学教養学部長	Nik Safiah Karim
十一月一六日	南開大学外文系教授	李 樹果
十二月 三日	上海交通大学講師	嚴 民





## 知のラビリンス―その彷徨

山室 信一

共同研究の発足に当たってすでに報告書の目次まで決まっていた、そんな事例もかつてあったという。その全く対極的な地歩から出発したのが「近代東アジア世界の構造連関」研究班である。つまり、この共同研究班の基本的スタンスは、何がわかっていいるか、ではなく、何がわからないか、を議論する点にこそある。

たとえば、「日本はアジアにある」という命題は、それを自明のことと思えばそれですませることができ。しかし、それではアジアとはいかなる概念としてヨーロッパで、なぜ現われたのか、そして日本はその概念をいかにして受け入れ、その概念のもとでいかなる対外観を育み、どういう対外的な交渉を行なってきたのか、いや、そもそもそこである日本といっているものの範囲に琉球（沖縄）は入っているのか、入るとすればいつからか；等々のことを問題にしていけば、それらの何ひとつ自明ではないことを否応なく認識せざるをえなくなるであろう。こうした問題索出型の議

論の場を設定し、既存の視座構造や理論枠組をいったんは白紙に戻して考え直してみようというのが班運営の基本方針である。いわばフローム・スクラッチ（ゼロからの出発）が班の理念であるともいえるであろう。しかし、もちろんいかに問題索出型の無手勝流とはいえ、解決すべき課題がないわけではない。いや、ないわけでないどころか、それがあまりにも明確であるからこそ、そしてあまりにも切実であるからこそ、あってこうしたアプローチを意識的に選び取ったと言うべきであろう。その課題とはなにか―世界史における近代日本の位相を明らかにすること、これである。

だが、それを一国史の枠内で捉えるかぎりでは永遠なる昨日の歌に唱和することにはかならない。そこで、「日本」といわれる地域を、その存在する場に置き直し、それが他の様々な地域とそこに住む人々と取り結んできた諸関係の総体として捉え直す試みとして該テーマを掲げ、手探りで鹿島立ちしたのである。

そして、出立から二年、近代とは、東アジアとは、構造とは、連関とは、さらに近代東アジアとは、構造連関とは、をめぐって行きつ戻りつを繰り返し、いまだ一条の光さえ見えない。しかし、「無知は力なり」との額が掲げられたこの迷宮では、「わからない」と叫び続けることでしか一歩も進めないのである。

## 中国音韻史の研究

高 田 時 雄

中国では近年、等韻書を中心とする明清時代の音韻資料の研究が活潑になってきた。中山大学の李新魁氏の『漢語等韻学』（一九八三）『漢語音韻学』（一九八六）がすでに多数の資料を紹介しているが、最近出た北京大学の耿振生氏の『明清等韻学通論』（一九九二）には二百種に近い等韻書の概要を載せている。さらに首都師範大学の馮蒸氏は、中国各地の図書館を博搜して一層豊富な明清韻学書の提要を準備中であると聞く。専門雑誌にもこの種の資料に関する論文がしばしば見られるようになった。これまで不当に閑却されてきた分野であるだけに、この傾向は中国語史研究の全面的展開にとってたいへん望ましいことである。昨年（平成五年度）から新発足した「中国音韻史」研究班でも明清時期を中心にすることにしたことは、はっきりと意識したわけではないが、自ずから時代の流れに沿った選択であったかも知れない。

しかし一般にわが国の研究機関で明清時代の韻学資

料を所蔵するところは非常に少なく、資料の入手という研究の第一段階ですでに困難に直面している。さすがに中国各地の図書館には、豊富な資料が存在するようだが、あいにくそれを手に入れる便宜が容易には得られない。『等韻源流』で有名な趙蔭棠氏や、その趙氏について学んだわが国の永島栄一郎氏のような、この方面の先輩研究者は、資料の入手にずいぶん留意されたらしく、その努力の結果が比較的まとまったコレクションとして残っている。台北の台湾師範大学には、非常に数多くの明清時期韻学書が所蔵されているが、これは趙蔭棠氏の旧蔵書がその中核になっているのだという。知る限り、単一図書館でこの種の資料を最も多く所蔵するのは、ここである。班員の岩田憲幸氏はこのコレクションから何点かの写真を得られた。趙蔭棠氏の旧蔵書はまた北京の語言研究所にも幾つかあると、同所の図書館長に聞いたことがある。わが国では永島氏の蒐集の精華部分が慶応大学にあると以前から聞いているが、その詳細はよくわからない。永島氏旧蔵書の一部はまた現在東京都立大学にも入っていると、やはり班員の太田斎氏から聞いた。いずれにせよ、今年はいった専門コレクションを中心に資料蒐集を本格的にはじめなければならないだろう。

## コミュニケーションの自然誌

谷 泰

社会関係は、コミュニケーションを介して成立・維持されている。コミュニケーション手段の発展によって、社会のあり方も変わる。その点に注目するかぎり、「コミュニケーションの社会誌」というのがふさわしい。また文化コード上の差異に注目するなら、「コミュニケーションの民族誌」というのがふさわしい。にもかかわらず、「コミュニケーションの自然誌」と、一見して不自然なテーマにしたのには理由があった。あえてそう言うことで、言語以前の身体的行為表現能力を維持しつつ、言語を使用するようになった人間の基本的な表象能力、そしてそれによって構成される相互行為的世界がいかにオーガナイズされているかを一般的に記述する、基本的な概念枠組みを、自然誌的なデーターを子細に分析することを通じて、抽出したいという期待があったからである。

身体的表現は、どこまでも自己についての言及から離れないのに対して、言語は、「いまここ」の現実

から離れ、しかも自己についての言及とは独立して、想定しうる世界について語ることができると思われる。いまそれを、言及を介した可能世界指定の能力ということにして、会話においてわれわれは、この指定された世界についての言及を介して、他者と対面している。もちろん、その指定される世界は、それを構成する要素や推論ルールをガイドする前提からなる。そして相互にコミュニケーションしあうわれわれは、それぞれが指定する世界の要素や前提にかんして、ある範囲の共軛性という、ひとまずの作業前提をもって対している。

ただ、言語的な表象装置でさえ、要素や要素を関係づけるスコープの指示には曖昧性があり、世界を構成するというより、世界を示唆するという表現が適切だろう。おまけに、世界指定にさいして、われわれは、その言及世界について十全な確定情報をつねに持っているわけではない。しかも相手が具体的にどのような情報を持ち、どのような文脈前提をもって、その世界に関与しようとしているかを、見透すことはできない。ここに、他者の読みへの操作の余地もあれば、齟齬も生ずる。ただ、まったく手がかりがなく、共軛性前提を指定出来ない状況で、コミュニケーションは成立しない。言及世界を示唆するための指示的な手がかり、また言及世界に対する主体の関与態度とでもいえる自

己言及的な言及の装置系として、身体行為をもふくめて、いかなる注意点があるのか。このような点は、具体的なコミュニケーションのあり方を記述しようとする研究者としての観察者にとっただけでなく、現実の相互行為状況での参与者にとっても、のっぴきならぬ注意点となる。

具体的な相互行為状況でのデータを分析し、意味以前、形式的側面で、これらの注意点を洗い出す作業を、三年間、それぞれの収集したデータに基づいて試みたが、記述上の概念装置の大枠の共有ができた段階にとどまっている。そのため、班長の定年までの三年間を、「コミュニケーションの自然誌2」とすることで、一層の詰めに向かうことにして、今回は、これまでに集めたデータに、注釈と分析を付した資料集を出版することにした。そこには、相互行為において相互に支持しあっている言及世界に、われわれがいかにミクロな注目のもとに、関与しあっているかが示されるはずである。



## 旅

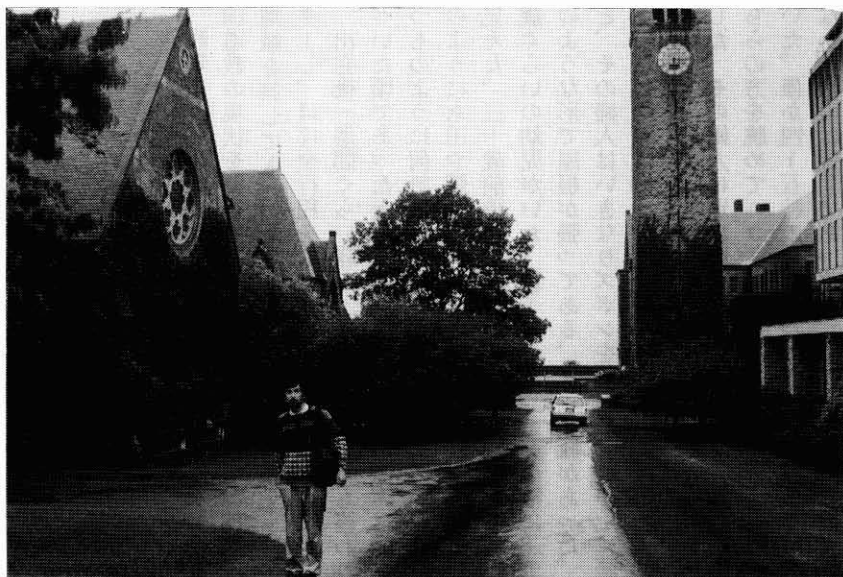
### アメリカの東アジア図書館

水野 直樹

一九九二年夏から一年間、ハーバード大学イェンチン研究所の客員研究員として米国に滞在した。朝鮮関係資料の調査・収集を主要な目的としての滞在であったので、この機会に米国各地の図書館・大学、特に東アジア研究の盛んな大学図書館を見ておきたいと考えた。

結果として、かなり駆け足ではあったが、十あまりの大学を訪問することができた。東部ではハーバード・イェンチン図書館をはじめメリーランド大学（プランゲ文庫）、コロンビア大学、プリンストン大学、コーネル大学、シカゴ大学、ペンシルバニア大学、西部ではカリフォルニア大学バークレー校、スタンフォード大学（フーバー研究所）、ワシントン大学、ハワイ大学などである。

これらの大学のほとんどは東アジア図書館をもっている。独立した図書館の建物がないところでも、大学図書館内に東アジアのセクションがあって、中国語・日本語・朝鮮語



コーネル大学で

などの図書・雑誌を集中的に収集・所蔵している。そこに  
行けばその大学の東アジア研究の条件・状況を推測するこ  
とができる。図書館システムが異なるので一概に言うこと  
はできないとしても、大学内のあちこちの図書館・図書室  
を回らなければ必要な文献が揃わない日本の大学の場合と  
比べると、利用しやすい。とりわけ日本で朝鮮語文献を集  
中のに収集しているところが少ないのに比べて、米国の各  
大学の東アジア図書館は朝鮮語文献も相当数所蔵している  
ことは、目を引くものがある。

あちこちの大学を訪れて興味深いのは、それぞれの大学  
の雰囲気が違うことである。大都市ニューヨークのど真ん  
中にあるコロンビア大学、同じニューヨーク州でも片田舎  
にあるコーネル大学というように、それは立地や建物の違  
いによるところが大きい、やはり図書館の中身にも左右  
されるようである。古くから朝鮮語文献を集めているハー  
バード・イェンチン図書館が伝統を感じさせるものである  
のに対して、最近意欲的に朝鮮語文献を収集しているワシ  
ントン大学の図書館は清新な感じが漂っている。それはシ  
アトルという町の雰囲気でもあろう。

それぞれ短期間の滞在だったにもかかわらず、各所で効  
率よく調べものができたのは、図書館の使いやすさによるも  
のだが、それだけでなく各図書館の職員と案内してもらっ  
た米国人、韓国人留学生のおかげでもある。

## 屋根のある瓶

横 手 裕

昨年（九三年）の九月から十一月までの二ヶ月余り、中  
国道教の現状を調査する調査団の一員として、長江以南の  
地域を旅してきた。上海で小型バスを運転手ごとチャー  
ターし、ほぼ全行程をこれに乗って移動した。

出発後一週間ぐらい経ち、浙江省内の調査も終わりに近  
づいた頃であったと思う。バスのいつもの座席に座り、い  
つものように何気なく車窓から風景を眺めていた。いつも  
のように水田や畑が雄大に広がっていた。ふと前方に人が  
見えた。三十歳前後かと思われる婦人と、その横に三、四  
歳ぐらいの幼児がいた。親子であろう。その横に、テント  
のような形で屋根が張ってある、大きな瓶があった。する  
と、その婦人はいきなりズボンを降ろし、瓶の上に腰掛け  
た。私は中国は初めてでないし、中国人の行動様式にもあ  
る程度慣れてきているつもりでいたが、これにはギョッと  
した。その婦人は別に恥じらう様子もなく、瓶の上からこ  
ちらの方を眺めてニコニコしながら我がバスを見送って  
いた。僅か四、五秒のことだったので、細部まで目が届か  
なかったのは残念であったが、その場の婦人の行為が何を

意味し、瓶は何の役割を果たすのかは一応理解が及んだ。

実は一昨年も同様の形で、遼寧から湖北・江蘇にわたって中国の北の方を旅してきた。その時見た厕所の類はどれも、入口に男・女の字が乱暴に書かれ二つに区分けされた例の建物であった。どんなに貧しい田舎であろうとそうであった。しかし浙江南部の農村ではそれはほとんど見られず、このような瓶が取って代わったのであった。何も周囲をさえぎるものが付いていないのだから、木の陰とか建物の裏といった所に置けばいいのになどと思ったが、何かそれは決して道路に面した所に置いてあるものであった。町のど真ん中の交差点の角に置いてあるものもあった。これ専用と思われる大瓶を山積みにして売っている店もいくつか目にした。極度に無駄を省いた形であるが、とにかく有用な資源は一滴たりとも漏らさず利用しようと後の目的を重視すれば、このように瓶一つを共用する方がむしろ都合がいいのかもしれない。そのような工夫というか徹底した実用主義が、貧しいながらもがりなりにも十数億の人々を食わせていけることの一因となっているのだろう、などと考えた。しばらくして福建省に入った頃には、もうこれは見られなくなっていったように思う。

## スリランカ再訪で思ったこと

田 中 雅 一

一九八二年六月から翌年一月まで一七カ月間、スリランカの小さな漁村に住んでいた。当時わたしは大学院の学生で、博士論文の資料を収集するためにスリランカに滞在していたのである。

最初の調査を終えた後は、すぐにでも戻って来たいと思っていたのだが、政情の悪化にともなって、再調査はほとんど困難になっていった。

短期ではあったがスリランカ再訪の機会を得たのは、ようやく一九九一年の夏になってからだった。八年ぶりということになる。それから二年後の一九九三年春にも訪ねることができた。

再訪および再々訪を通じて、強く心に感じたのは、わたしはこの人たちのことをなにとよく知っているのだろう、という驚きだった。考えてみればそれは不思議ではない。毎日村人の家を訪ね、家族構成から血縁関係、職業、収入、財産などありとあらゆることをしつこく聞いて回ったのだ。調査は、時には井戸端会議ふうにもなり、インフォーマンツの愚痴を聞かされるはめになることも、また酒を飲みな



キリスト教徒の初潮儀礼

がらのワイ談に発展することもあった。わたしがしたような質問を、村人たちもわたしに遠慮なく聞き返した。

振り返ってみると、三一歳の時に高槻市に移り住むまで、わたしは生活拠点を一〇回以上変えている（五〇メートル以内の引っ越しまで含めると二二回にもなる）。学生という身分のせいもあったが、近隣とのつきあいというものには縁が薄かった。現在の場所には七年半も住んでおり、これは自己最高記録なのだが、それでも妻子はともかくわたし自身が近所の人々ときあうということはほとんどない。わたしは今まで自分の回りに住んでいる人たちについてほとんどなにも知らないまま生きてきており、しかもそれを意識することさえなかった。遠いスリランカで、なつかしい村人に再会して初めてわたしはそのことを思い知らされたのであった。

ただし、ここに記した思いはフィールドワークをおこなったという事実で説明されるものではない。フィールドワークは必要条件だが、十分条件ではないのだ。再訪する前のスリランカでの生活は特別なものに違いなかったが、過去の体験のひとつにすぎなかった。それが再訪してはじめて自分の人生に深く織り込まれることになったのだ。再訪することでもわたしはフィールドで出会った人々との同時代性を不十分ながらも実感できたのだと思う。



書いたもの一覧 一九九三年一月～一九九三年二月（五十首順）

●単行本）

飛鳥井 雅道

解説・前田愛『近代読者の成立』

岩波書店 六月

書評・大和田茂『社会文学一九二〇年前後』

社会文学 七号 七月

明治天皇・「皇帝」と「天子」のあいだ

立命館言語文化研究 五巻一号 一〇月

浅原 達郎

「熱中」の人―端方伝―（五）

泉屋博古館紀要第九巻 三月

楚文学の「陵」について

『中国出土文字資料の基礎的研究』三月

●訓読説文解字注宛冊（共訳）

東海大学出版会 三月

荒牧 典俊

The Development of the Term "Pātimokkha" in Early

Buddhism (Premier Colloque Étienne Lamotte, Institut

Orientaliste, Université Catholique de Louvain) 一〇月

大乘仏典 中国・日本篇3 『出三蔵記集・法苑珠林』（出三蔵

記集を担当）中央公論社 十二月

井狩 彌介

●インドⅡ複合文化の構造（共編）

法蔵館 一月

ヒンドゥー教文献の構造と展開―カシミールのプラーナ文献から―『インドⅡ複合文化の構造』 法蔵館 一月

●From Vedic Altar to Village Shrine: Towards an Interface

between Indology and Anthropology (Co-ed.), Semi

Ethnological Studies 36

九月

Aspects of the Evolution and Cultural Integration of

Hinduism: The Case of a Purāna from Kashmir, In Y.

Nagano and Y. Ikari (eds.) Vedic Altar to Village

Shrine: Towards an Interface between Indology and

Anthropology, Semi Ethnological Studies 36

九月

石川 禎浩

●周恩来伝 下巻（共訳）

阿咩社 二月

一九一〇年長沙大森米の「鎮庄」と電信

史林 七六巻四号 七月

翻訳・桑兵著「孫中山と庚子勤王運動」

孫文研究 一五号 七月

五四時期李大釗的思想與茅原華山、陳溥賢

文史哲 一九九三年五期 九月

価値多様化の中で揺れる中国

京都新聞 一〇月

上野 成利

三〇年代ホルクハイマーの思想の再検討

社会思想史研究 一七号 九月

宇佐美 齊

La Conscience du temps chez Rimbaud, in Arthur

Rimbaud, un siècle d'errances, Presses Universitaires de  
Lille. 一月

詩人建築家の夢

新生(第十五卷冬号) 一月

鎮魂の調べから嘆きぶしへ——辻井喬著『群青、わが黙示』を

めぐって——

新潮 二月

書評・『モンテニユ旅日記』

産経新聞 二月

韻文詩翻訳の二つの可能性——上田敏と柳澤健による LE

BATEAU IVRE 翻訳の試み——

人文学報(第七十二号) 三月

Les Métamorphoses du diseur de soi—Maurice de Guérin

et la recherche d'une nouvelle langue Equinoxe No. 10

(numéro spécial consacré au Romantisme français). 四月

書評・パウエル著『ヘルシャの鏡』

産経新聞 五月

内なる古都

海鳴り(第八号) 八月

書評・バタイユ著『聖女たち』

産経新聞 九月

書評・岩阪恵子著『淀川にちかい町から』 産経新聞 十一月

「私」の肥大と解体——啄木詩の変貌をめぐって—— 中西進

編『日本文学における「私」』 河出書房新社 十二月

梅原 郁

◎中国近世の法制と社会(編著)

京都大学人文科学研究所 三月

唐宋時代の法典編纂——律令格式と勅令格式——『中国近世

の法制と社会』

三月

「宋史刑法志」訳注稿(下)(共記)

東方学報(京都)第六五冊 三月

書評・村井章介著『近世倭人伝』 しにか 九三年八月 八月

大浦 康介

村上流——感覚の思想と『イヒサ』——

国文学 三八卷三号 三月

追悼・中上健次(浅田彰氏との対談) Sturm 三号 三月

Narrateur e(s)l personnage <III> Zinbun No. 27 三月

L'imagination romantique et la nature Equinoxe No. 10

(numéro spécial consacré au Romantisme français). 四月

ジャン＝ペリー・シェフェール「思弁的芸術理論と『モダニズ

ム』(翻訳)

批評空間 十号 七月

Le grand cinéma des échanges culturels (インタヴュー)

Les Voix No. 63 八月

落合 弘樹

留守政府期の秩禄処分と井上馨

伊藤隆編『日本近代史の再構築』

山川出版社 四月

書評・竹中亨著『明治国家とジーマンス』

久我通久 税所篤

史林 七六一三 五月

『日本史大事典』第三卷

平凡社 五月

田中光顕

『日本史大事典』第四卷

同前 八月

書評・稲葉光彦著『窮民救済制度の研究』

日本歴史 五四四号 九月

小野 和子

抗清運動与日本 関于隠元禅師

『清代区域社会経済研究』下 九二年八月

山西商人和張居正

『明清山西商人研究』 九二年八月

清末の新刑律暫行章程の原案について

『柳田節子先生古稀記念中国の伝統社会と家族』

汲古書院 五月

『雍正硃批諭旨』のこゝ

『宮崎市定全集』月報 十一月

岸本 美緒

明清契約文書 滋賀秀三編『中国法制史 基本資料の研究』

東京大学出版会 二月

崇禎一七年の江南社会と北京情報 『和田博徳教授古稀記念

明清時代の法と社会』

汲古書院 三月

書評・小山正明著『明清社会経済史研究』

歴史学研究 六四三号 三月

書評・P・A・キューン著『魂の盗人』

東洋学報 七四卷三・四号 三月

中国中世における民衆と学問 『中世史講座』八・中世の宗教と学問 学生社 六月

訳注・周紹泉著「徽州文書の分類」 史潮 新三二号 六月

比較国制史研究与中国社会像

人民の歴史学 一一六号 六月

明末清初江南の地方民衆と権力者たち

歴史学研究 六五一号 一〇月

桑山 正進

觸地印の坐仏を容れたストゥーパ 坪井清足さんの古稀を祝う

会編『論苑考古学』

天山舎 三月

六一八世紀 Kāpīś-Kābul-Chazni 地方の貨幣と支配者

東方学報(京都) 第六五冊 三月

アフガン陶房誌一九七七

西南アジア研究 三八号 三月

The Hephthalites in Tokharistan and Gandhara, Part 1,

Gandhara. *Lahore Museum Bulletin*, Vol. 5, No. 1

(January-June, 1992)

八月

小南 一郎

神亨壺と東奥の文化

東方学報(京都) 第六五冊 三月

書評・V・H・メヤー『唐代変文——中国俗文学成形に対する

仏教の貢献』

中国文学報 四六冊 四月

夏商周の歴史と伝承——中国第一王朝を求めて——中国王朝の誕

生展図録解説

四月

国家成立の条件 中国王朝の誕生展によせて 読売新聞 五月  
樓学の伝統 京大広報 四四七 五月

◎三国志(呉書I・III) ちくま学術文庫 五月〜七月

◎中国的神話伝説与古小説(孫昌武訳) 中華書局 六月

◎大乘仏典(中国・日本篇) 三 共訳(法苑珠林を担当) 中央公論社 一二月

阪上 孝

円環とその外部 岩波講座・現代思想5『構造論革命』 岩波書店 九月

フランス革命と国民の創出 社会思想史研究 一七号 九月

アルチュセールを読む 情況 一一月

佐々木 克

書評・山本四郎編『近代日本の政党と官僚』

史林七六一 一月

岩倉具視と万里風信 霊山歴史館紀要6号 四月

◎古文書の読み方(第五卷 近代その二) ビデオ 丸善 一二月

曾布川 寛

漢代画像石における昇仙図の系譜

東方学報(京都) 第六五冊 三月

龍門「石窟における北朝造像の諸問題 礪波護編『中国中世の文  
物』 京都大学人文科学研究所 三月

漢代祠堂画像の裝飾の意味 国際交流美術史研究会第十一回  
シンポジウム「東洋美術における裝飾性」 三月

山水画に現れる「気」 しにか 一一月

高田 時 雄

チベット文字書写「長卷」の研究(本文編)

東方学報(京都) 第六五冊 三月

Ein chinesischer Turfan-Text mit uigurischen phonetischen Glossen, *Altorientalische Forschungen* 20-2, (mit Simone-Christiane Raschmann)

書評・池田温編『敦煌漢文文献』(『講座敦煌』第五卷) 六月

東洋史研究 五十二 六月

田中 淡

高低冥々として東西を知らず―検証・阿房宮、その実態を探る

歴史群像シリーズ 32 項羽と劉邦・上巻 学研 一月

变化的弥生時代建築情形―日本唐古・鍵遺址新出土器刻画

文物天地 第一期 一月

歴史にみる先端技術導入の場面 イリニウム 九号 四月

貴州トン族の集落調査から―序に代えて―

住宅建築・特集「蘇洞―貴州トン族の村と生活」 四月

黄才貴「トン族村落の公共建築」(共訳) 同右

羅徳啓「貴州ブイ族の石造建築」(共訳) 同右

《墨子》城守諸篇研究 文博 第三期 五月

關於中国割烹史的新發現資料―粉食、蒸籠、炙、脯、膾、俎、

抹茶及其他『第一届中国飲食文化學術研究会論文集』

財団法人中国飲食文化基金会 七月

東大寺大仏殿

『エッセイでつづる日本の歴史・上』

文藝春秋 一月

◎世界の歴史と文化・中国「第三章・建築」

新潮社 一月

私の中国建築史研究

水煙 二三号 一月

田中雅一

スリランカ・タミル漁村における女性の地位—親族組織と経済の領域を中心に— 西南アジア研究 三六号 九二年三月  
儀礼的暴力の変容—供犠からジェノサイドへの道程— 情況 一月

南インドの寺院組織と司祭たち—自立への志向と相互依存—

長野泰彦・井狩彌介編『インド—複合文化の構造』

法蔵館 一月

神々のかたち—民衆ヒンドゥー教の世界—

京大広報 二月

無限大の乳房、等身大の陽根—性幻想のインドから—

imago 二月

スリランカのヒンドゥー寺院政策—少数民族の宗教への視座—

田辺繁治編『実践宗教の人類学—上座部仏教の世界』

京都大学学術出版会 三月

文化人類学概論研究会記録（座談会）米山俊直・福井勝義編

『文化人類学教授法カリキュラムの研究』放送教育開発セン

ター 三月

スリランカ・タミル漁村の家族と世帯—クドゥンバムをめくつ

て—前川和也編『家族・世帯・家門—工業化以前の世界から』 ミネルヴァ書房 四月

ヒンドゥー原理主義とその背景

いずみ 六月

性のオリエンタリズム—インドの性幻想とその解釈をめくつて

—須藤健一・杉島敬志編『性の民族誌』人文書院 六月

漁業儀礼考—スリランカ・タミル漁村における地曳網漁をめくつて— 国立民族博物館研究報告 十八巻一号 七月

万国宗教会議百周年記念インド大会・パネル討議①

いずみ 七月

万国宗教会議百周年記念インド大会・パネル討議②

いずみ 八月

Why are Brahman Temple Priests Highest in the Caste Hierarchy?—A Case of Chidambaram Natarāja Temple, South India. In Yasuhiko Nagano and Yasuke Ikari (eds.), *From Vedic Altar to Village Shrine. Semi Ethnological Studies* 36 九月

谷 泰

再版によせて『E・ホール・文化を超えて』

TBSブリタニカ 二月

現代文明と聖なるもの 岩波講座・宗教と科学9『新しいコス

モロジー』 岩波書店 四月

C・ギャーツ「文化体系としての宗教」改訳と解題 岩波講

座・宗教と科学別巻2『宗教と科学』基礎文献外国篇

岩波書店 八月

誰が最初に乳を搾ったか『動物たちの地球 一二一、家畜化のはじまり』  
週刊朝日百科 一〇月

塚本 明

書評・『京都冷泉町文書一・二』 古文書研究 三七号 五月

礪波 護

玄秘塔碑考 永田英正編『中国出土文字資料の基礎的研究』

◎中国中世の文物(編)

唐代の過所と公驗『中国中世の文物』 京都大学文学部 三月

解説・川勝義雄『中国人の歴史意識』(平凡社ライブラリー) 同 三月

白居易の生きた時代 白居易研究講座二 平凡社 六月

制度通 日本史大事典4 勉誠社 七月

マニ教 世界『宗教』総覧 新人物往来社 一〇月

東洋史学と世界史学 板垣雄三編『世界史の構想』 平凡社 八月

地域からの世界史21 朝日新聞社 一〇月

唐・都城ほか 日本史大事典5 平凡社 一一月

解説・宮崎市定『水滸伝』(中公文庫) 中央公論社 一二月

富 永 茂 樹

群集、トクヴィル他二七項目『新社会学辞典』 有斐閣 二月

立山正一展に寄せて 『立山正一展』都城市立美術館 三月

ミシェル・フーコーあるいは遊びの欠如について

世界思想二〇号 世界思想社 四月  
ユーロ・ディズニールランド

井上俊編『現代文化を学ぶ人のために』世界思想社 五月  
相互理解という『幻想』

『コミュニケーション・システムのリデザイン』  
C・D・I 一二月

富 谷 至

漢簡 滋賀秀三編『中国法制史——基本資料の研究』

大英図書館蔵の敦煌漢簡『中国中世の文物』 東大出版会 二月

不吉を運んできた馬 汗血馬 京都大学人文科学研究所 三月

中 砂 明 徳 しにか 五月

唐代の墓葬と墓誌 礪波護編『中国中世の文物』 京都大学人文科学研究所 三月

狭 間 直 樹

盧梭『民約論』与中国

『近代中国与世界』国際学術研究会論文集

◎『周恩来伝』下巻(監訳) 中国社会科学学院近代史研究所 阿吽社 二月

中国における中国近代史研究の動向 小島晋治他編『近代中国研究案内』 岩波書店 六月

◎日本孫文研究会編（編集代表）『孫文とアジア—一九九〇年八月国際學術討論會報告集— 孫中山記念會研究叢書二』（自作）  
…朱執信と孫文の民生主義）  
汲古書院 六月

藤井 讓 治

板倉勝重と重宗

私にとつての『池田家文庫』

◎福井県史（共編）

美浜万治の歴史

「源家康」の印章

◎『平野神社史』〔共著〕

江戸幕府の成立と天皇『講座前近代の天皇』2

『絵馬』総説

◎『小浜市史』絵図地図編（共編著）

書評・藤田恒春『増補駒井日記』

板倉勝重と重宗（再録）『千年の息吹き』中

板倉勝重と重宗（再録）『千年の息吹き』中

板倉勝重と重宗（再録）『千年の息吹き』中

板倉勝重と重宗（再録）『千年の息吹き』中

板倉勝重と重宗（再録）『千年の息吹き』中

板倉勝重と重宗（再録）『千年の息吹き』中

板倉勝重と重宗（再録）『千年の息吹き』中

板倉勝重と重宗（再録）『千年の息吹き』中

板倉勝重と重宗（再録）『千年の息吹き』中

板倉勝重と重宗（再録）『千年の息吹き』中

板倉勝重と重宗（再録）『千年の息吹き』中

板倉勝重と重宗（再録）『千年の息吹き』中

板倉勝重と重宗（再録）『千年の息吹き』中

板倉勝重と重宗（再録）『千年の息吹き』中

船山 徹

A Study of *Kalpanapodhu*: A Translation of the *Tattva-*

*sangraha* vv. 1212-1263 by Santarakṣita and the *Tattva-*

*sangraha* by Kamalaśīla on the Definition of

Direct Perception *Zinbun* 27 三月

古屋 哲 夫

「満洲国」の創出 山本有造編『満洲国』の研究

京都大学人文科学研究所 三月

前川 和 也

◎家族・世帯・家門—工業化以前の世界から（編著、京都大学

人文科学研究所報告）

The agricultural texts of Ur Ⅲ Lagash of the British

Museum (IX), *Acta Sumerologica* 15 (1993).

古代シュメール農業の播種技術

西南アジア研究 三八号 三月

水野 直 樹

在日韓国・朝鮮人の歴史2—解放前大阪を中心とする在日朝

鮮人運動『足もとの国際化—在日韓国・朝鮮人の歴史と現

状』

梶村秀樹著作集第5巻『現代朝鮮への視座』解説・解題

海風社 六月

能におけるリズムのアンサンブル

月刊言語 一二—一一 一一月

藤田 隆 則

世阿弥の「地謡不用論」

歌い手としての脇之為手『谷村晃先生退官記念論文集 音と言

葉』

能におけるリズムのアンサンブル

月刊言語 一二—一一 一一月

光 永 雅 明

マーク・ボスター「情報様式とポストモダン」(翻訳) 岩波講座・社会科学の方法8『システムと生活世界』

岩波書店 九月

麥 谷 邦 夫

梁天監十八年紀年銘墓碑と天監年間の陶弘景『中国中世の文物』 京都大学人文科学研究所 三月

茅 山——江南の道教聖地—— 日中文化研究 四号 四月

森 時 彦

日本棉紡工業資本對華投資与中国花紗市場——關於印棉運華聯合會的歷史意義 蔣永敬等編『近百年中日關係論文集』

中華民国史料研究中心 一九九二年六月

◎周恩来伝 一八九八—一九四九 下卷(共訳、解題) 阿吽社 二月

矢 木 毅

高麗睿宗朝における意思決定の構造 史林 七六一—二 三月  
書評・周藤吉之著『宋・高麗制度史研究』

東洋史研究 五一—四 三月

安 富 歩

満業の資金調達と資金投入 人文学報 七二号 三月  
「満洲国」経済開発と国内資金流動 山本有造編『満洲国』の

研究』

京都大学人文科学研究所 三月

山下 正 男

法的思考とはなにか——義務論理学の効用性—— 山下正男編『法的思考の研究』 京都大学人文科学研究所 一月

自然言語に災いされたヨーロッパ哲学

人文学報 七一号 一月

ヨーロッパ思想とアジア思想の構造的同一性について

人文学報 七二号 一月

神と論理学

中世哲学研究 一二号 十一月

山 室 信 一

「自由民権運動」「大日本帝国憲法発布之図」「満州とは何か」「日本の歴史・4」 朝日新聞社 一月

書評・松岡信一著『自由新聞』を読む 図書新聞 二月

満洲国統治過程論 山本有造編『満洲国』の研究』

京都大学人文科学研究所 三月

◎キメラ——満洲国の肖像

風声鶴唳——影に怯えて—— 大杉栄ら墓前祭実行委員会編『自由の前触れ』 九月

「公論」世界と国民国家 安丸良夫・宮地正人両氏と鼎談 思想 八三一号 九月

思想連鎖的渠道及其反説 中国上海社会科学学会連合会他編

『了解・理解与合作』 上海社会科学出版社 一〇月

ことは抄 朝日新聞夕刊(東京版) 一〇月



書評・高崎宗司著『反日感情』 熊本日日新聞 一〇月

思想の連鎖そして歴史の共有へ 中央公論 一一月

偉大なる未完—J・フォーゲル著『中江丑吉と中国』に触れて

洪沢研究 六号 一一月

国際化と満洲 産経新聞夕刊 一一月

満洲国憲法案の行方 日本歴史 五四七号 二月

## 山 本 有 造

イタリア掃苔の旅

日本イタリア京都館々報 Corrente, Vol. 11, n. 115,

九二年二月

「満洲国」国民所得統計について 溝口敏行編「第二次大戦下

の日本経済の統計的分析」(平成二一四年度科学研究補助

金・総合研究A・研究成果報告書) 一月

◎「満洲国」の研究(編) 京都大学人文科学研究所 三月

「満洲国」をめぐる対外経済関係の展開——国際収支分析を中

心として—— 同右

落伍者からの謝辞 青碧 一九号(青山秀夫先生追悼) 四月

「不機嫌」の吉田光邦先生『吉田光邦・両洋の人——八十八人の

追想文集』 一一月

洋銀と円 『日本歴史館』小学館 一一月

## 横 山 俊 夫

日曜論争・京都——歴史都市の将来(安藤忠雄氏と)

毎日新聞朝刊(大阪・東京) 一月三一日

The 4th World Conference of Historical Cities/First Circular (共編) 京都市国際交流室 一月

当世名前事情

『News Letter』No. 2 一乗寺国際研修センター 一月

「ガイジン」上田篤編『面白い都市』 学芸出版社 二月

書評・Britain's Encounter with Japan, 1868-1912. By Olive

Checkland. The Macmillan Press, London, 1989. Journal

of Japanese Studies (Washington), Vol. 19 No. 1, 1993.

二月

歴史都市の課題と交流 上・中・下(西川幸治・宮前保子両氏

と鼎談)

京都新聞朝刊 三月七・一四・二一日

貝原益軒本流布に関する社会史的研究(平成4年度科学研究費

補助金実績報告書・一般研究 c)

文部省学術国際局宛提出 三月

校閲・木田安彦『ちよっと昔の京都』 河出書房新社 三月

監修・Lacquer Ware-Works of Art in Everyday Life, Sumitomo Quarterly, No. 52. 三月

共同体の原像と社会契約——ヒトとサルの間(伊谷純一郎・河

上倫逸両氏と鼎談)『比較法史研究』2 未来社 三月

シンポジウム'92 留学生の目から見た日本の大学(司会・編

集)

京都市・大学事務連絡協議会 三月

京都府文化フォーラム/総括座談会(井上章一・樺山紘一・高

田公理各氏と)(司会・編集)

京都府文化芸術室 三月

年中行事と災害 防災科学資料センター・ニュース No. 5

京都大学防災研究所 三月

迫りくる安定社会 ―その明と暗― 文化会議 二八六号

日本文化会議 四月

貝原益軒『家道訓』考 前川和也編『家族・世帯・家門 ―工業化以前の世界から―』 ミネルヴァ書房 四月

国際交流基金派遣日本研究専門家報告書

国際交流基金日本研究課宛提出 七月一〇日

監修・Washi: Japanese Hand-Wade Paper that Fits Beautifully into Japanese Life, *Sunitomo Quarterly*, No. 53 七月

事典項目・西域物語／節用集『日本史大事典』第四卷

平凡社 八月

The 4th World Conference of Historical Cities/Second Circular (共編) 京都市国際交流室 八月

肉体に癒着した時間 横山俊夫・田中雅一共編『けいはんなマラソンセミナー 人間・生物・時間』第一回研究会記録 けいはんな 九月

『21世紀への道程』(3) 第6回富士会議報告

日本アイ・ビー・エム 九月

監修・The Five-Story Pagoda: Essence of Wooden Construction, *Sunitomo Quarterly*, No. 54 九月

挨拶・討論参加『生態学からみた安定社会 多様性の維持と促進 ―タンガニイカ湖の魚類群集から』川那部浩哉・遊磨正秀編 第4回京都国際セミナー 京都ゼミナルハウス 九月

校閲・木田安彦『世界の市』 河出書房新社 十月

討論会・ふるまい ―行動の文化(いとう せいこう・井上 章子・日下公人・鷺田清一各氏と)

京都新聞朝刊 一〇月二六日

●共編著・吉田光邦追想文集刊行会『吉田光邦 両洋の人―八十八人の追想文集』 思文閣出版 十一月

事典項目・日本研究／イギリス(ゴードン・ダニエルズ氏と共同執筆)『日本史大事典』第五卷 平凡社 十一月

Setsuyoshu—das gesammelte Wissen in einem Buch/ Zusammenfassung 14, Japan-Seminar der Volkshochschule Brittenau und des Instituts für Japanologie der Universität Wien. 十一月一〇日

第三回平安宣言シンポジウム・京都を見る世界の目(安藤仁 介・中野良子・諸井誠・河上倫逸各氏と)

京都新聞朝刊 十二月一九日

監修・Kodo: The Art of Seeking Spiritual Enrichment in Fragrance, *Sunitomo Quarterly*, No. 55 十二月

吉川 忠 夫

裴松之のこと(ちくま学芸文庫「正史三国志」2 解説)

筑摩書房 一月

●景德伝灯録研究会編『訓注景德伝灯録』三(巻七・八・九) 卷八則川和尚章・浮孟和尚章 禅文化研究所 三月

韓愈と大顛 礪波護編『中国中世の文物』

京都大学人文科学研究所 三月

陳寿と譙周(ちくま学芸文庫「正史三国志」6 解説)

薄葬の思想

思想

筑摩書房 五月  
八二八号 六月

白居易における仕と隠 『白居易研究講座』第一卷

勉誠社 六月

シンボルとしての亀と鶴 『大阪城新能』 読売新聞社 七月

書評・葛兆光著、坂出祥伸監訳『道教と中国文化』

週刊読書人 八月五日

「中外日報」社説 一五回

一月～二月



おもしろく読んだ本

木島 史雄

『書物から読書へ』 ロジェ・シャルチエ編 水林章、泉利明、

露崎俊和共訳

みすず書房

『読書の文化史 テクスト・書物・読解』 R・シャルチエ著

福井憲彦訳

新曜社

安 富 歩

エドガール・モラン

複雑性とは何か

フォン・ノイマン

国文社

自己増殖オートマトンの理論

岩波書店



